

北海道遺産に選定された「土の館」に寄せて

今から13年前に北海道上富良野町にスガノ農機(株)が開設した「土の館」が北海道遺産に認定された(本号「農・業界」参照)。

北海道遺産は北海道が世界に誇り後世に残すべき遺産として97年に当時の堀知事によって提唱された事業で、2001年に最初の25件が認定された。さらに今年10月、第2回の認定遺産27件の一つとして「土の館」が選ばれたものである。

北海道遺産には北海道の観光開発という側面もあるが、先人たちが北海道開発に取り組んだ勇氣と努力を今の時代に再確認し、道民の誇りを鼓舞しようという意図がある。

「土の館」はまさに北海道農民の苦闘の歴史と勇氣を伝える優れた記念碑である。その意味で、「土の館」が北海道遺産に認定されたことにお祝いを申し上げるとともに、一人でも多くの人々が「土の館」をお訪ねになることをお勧めする。

筆者は本誌創刊号で「土の館」に展示された巨大土層見本(土壌モノリス)を題材にして「土を信じる者」という創刊の辞を書いた。

そのモノリスは「土の館」のある上富良野町の水田圃場の土層を採取したものだ。それは単に地学あるいは土壌学的意義ばかりでなく、そこに生きた人々、たび重なる災害を乗り越えて農業を続けて来た人々の歴史を示す土層見本であるからだ。

上富良野町は入植30年後の1926年(大正15年)2月24日、十勝岳の噴火で大災害に見舞われた。溶岩が雪を溶かした泥流が144人の命を奪い、800haの畑と500haの水田を泥流の下に埋めた。浅い所でも30cm、深い場所では2・5mもの深さに及んだ。

開拓の志を挫かれ、農地を捨てて故郷に帰る人々、あるいは新たな土地に移って行く人々も少なくなかった。しかし、開拓の意志を継ぎ、再び未来を求めてモッコで山から土を運び、泥流に埋まった田畑に客土する人々がいた。そして、彼らは耕し続け、土を作り続けた。

「土の館」に展示されたモノリスとは、太古からの自然が作り出した土層とともに、そんな人々の勇氣と意志の歴史を記録しているのである。

「土の館」は、世界のプラウと土の博物館と銘打たれ、さまざまな

トラクタやプラウが日本国内のどの農業展示館より充実して展示されている。また、日本全国から集めた土層見本は農業にかかわる者にとって多くの示唆を与えるであろう。

また、蒸気機関のトラクタをはじめとしたトラクタやプラウの展示も、マニアたちを満足させるものであろう。それを見ると、今では想像もつかない大きな投資をしてトラクタを導入した先人たちの農業経営に賭けた夢や勇氣を同時に想像してみてもいいかと思う。

本誌の原点の一つは、あのモノリスに示された人々の意志と勇氣であると言ってもよい。土を信じて戻し続け、作り続ける勇氣。筆者が考える「土」とは足元の耕す土であるとともに、家族であり、仲間であり、取引先であり、そして何よりも顧客なのである。

誰も飢えてはいない時代。否応もなく国境を越えて世界がつながる時代——泥流に上富良野の農地が埋め尽くされた時代と現代とは大きな違いもある。しかし、そんな現代の我々であればこそ、「土の館」から学ぶ変わりようもない理念を失うべきではない。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺しの稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。